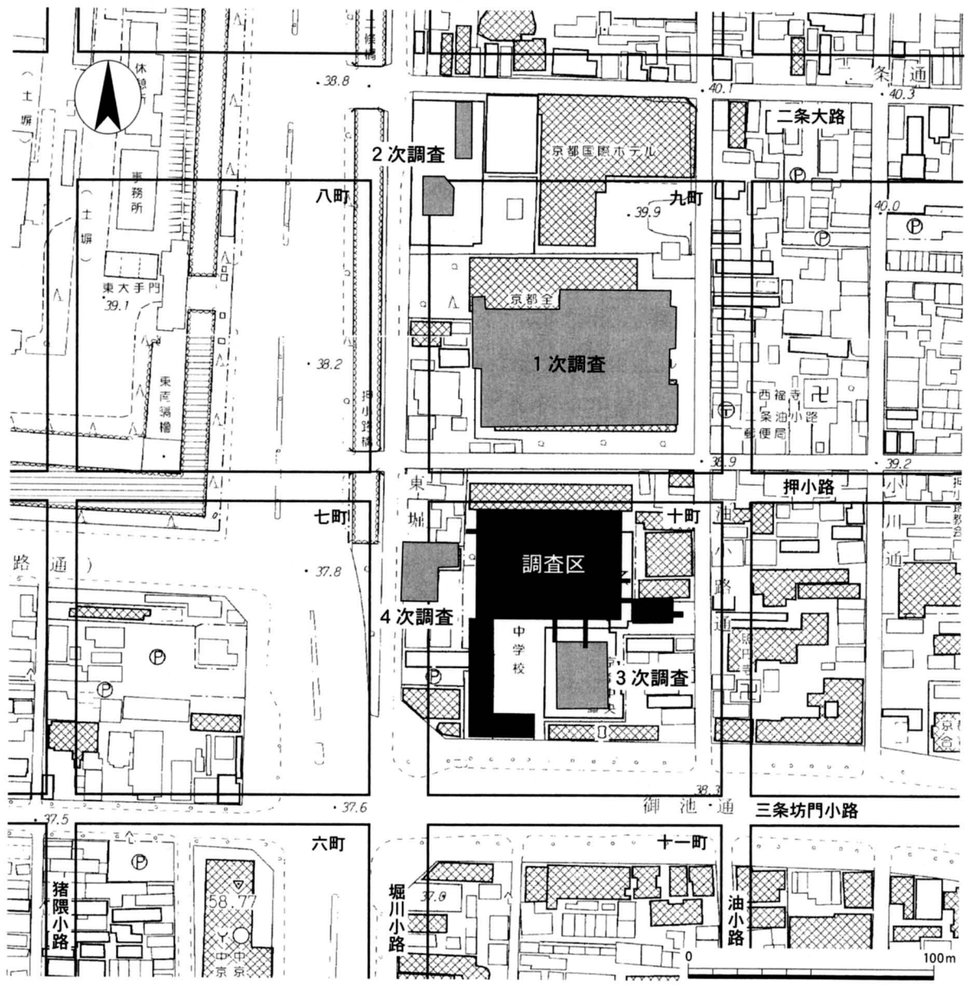
平安京左京三条二坊十町跡（堀河院跡、元城巽中学校）の発掘調査

(財)京都市埋蔵文化財研究所　丸川義広

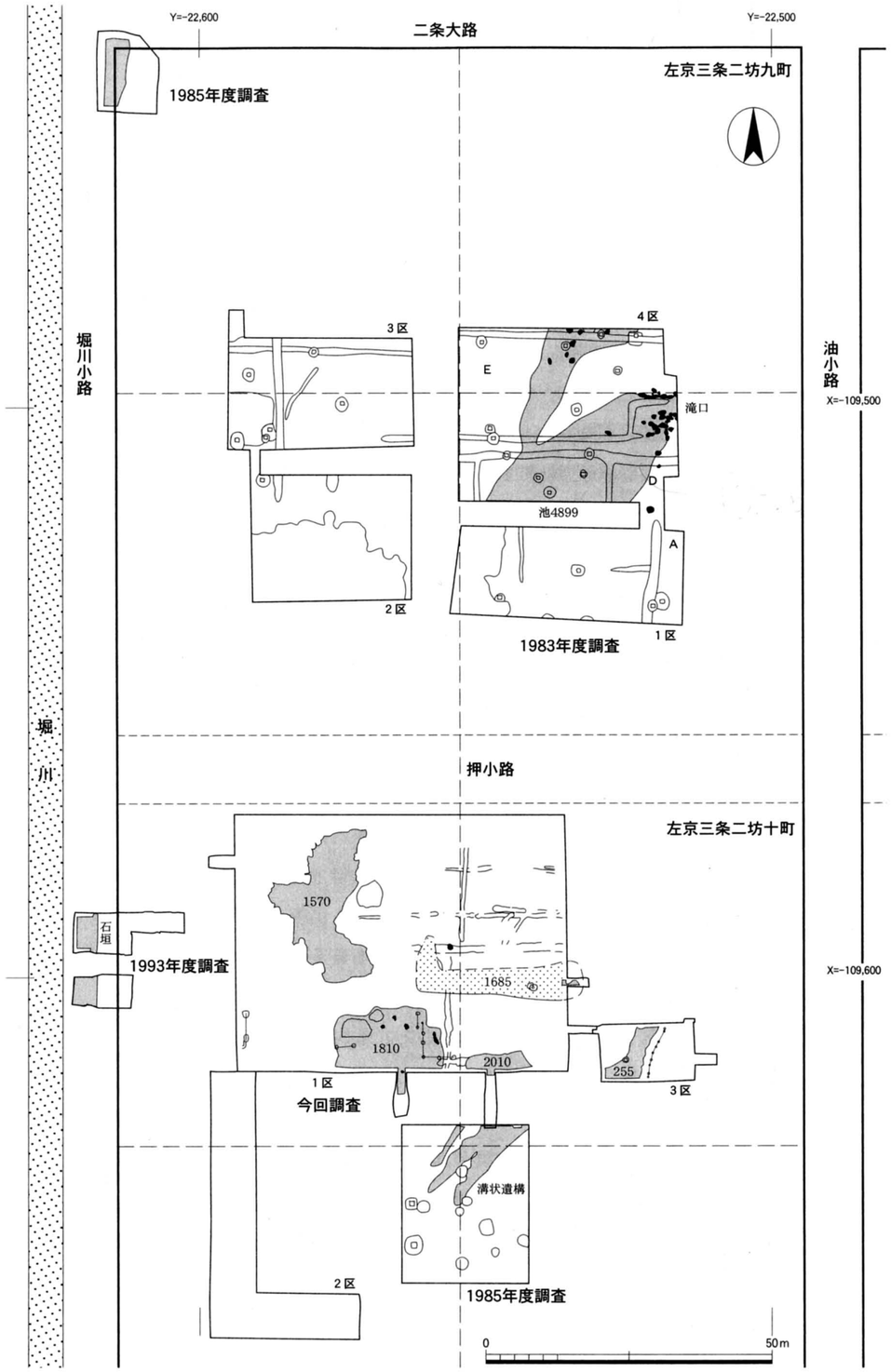
2007 年を中心に著名な里内裏「堀河院」の南半分にあたる平安京左京三条二坊十町、元城巽中学校で発掘調査を実施した。該当期の池を検出し、堀河院に関する重要な知見を得たので、堀河院の池を中心に江戸時代の遺構、明治時代の遺物についても解説する。

掲載図は、断りがない限り以下による。

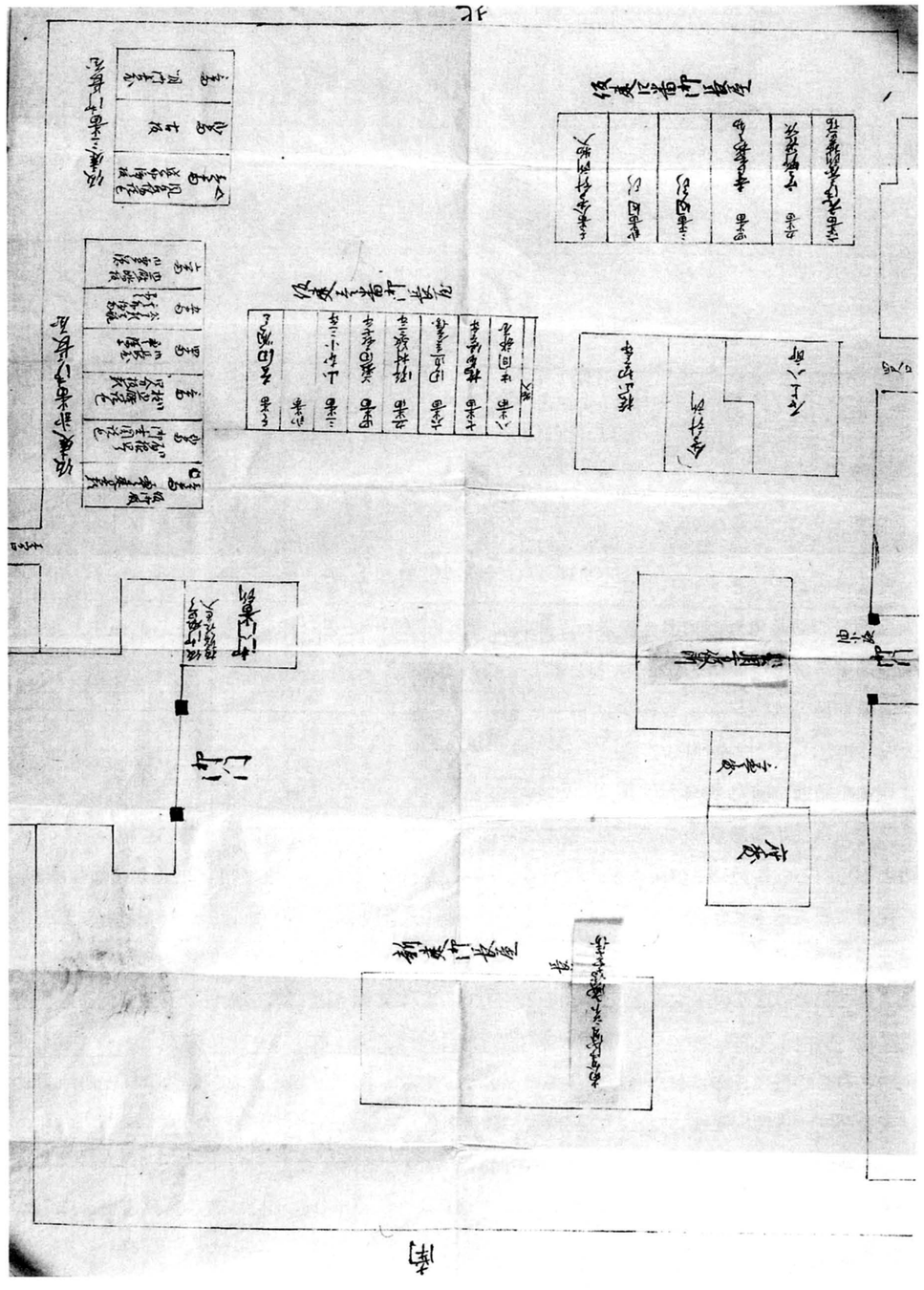
『平安京左京三条二坊十町（堀河院）跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-17　2008 年 3 月



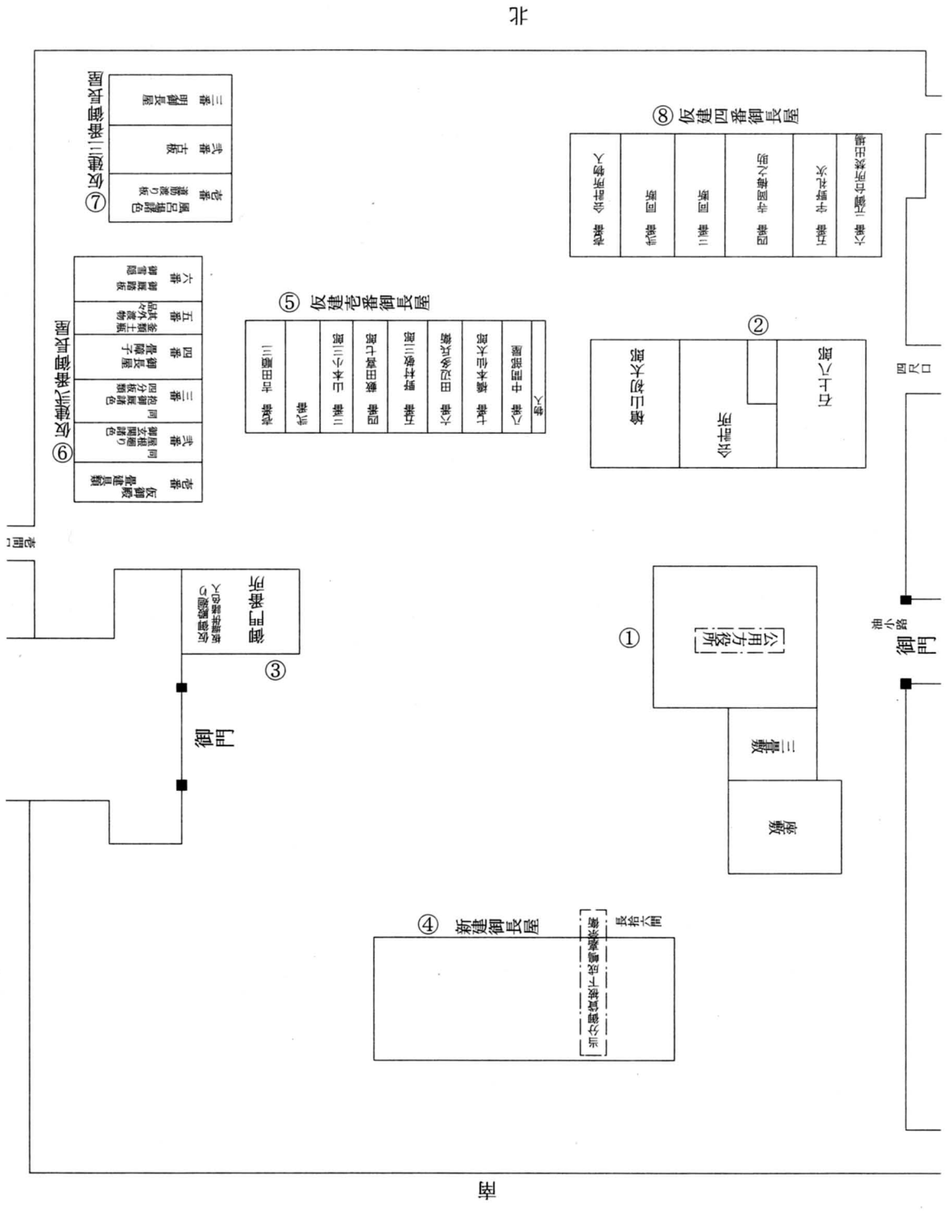
調査位置図（1：2,500、報告書 P11）



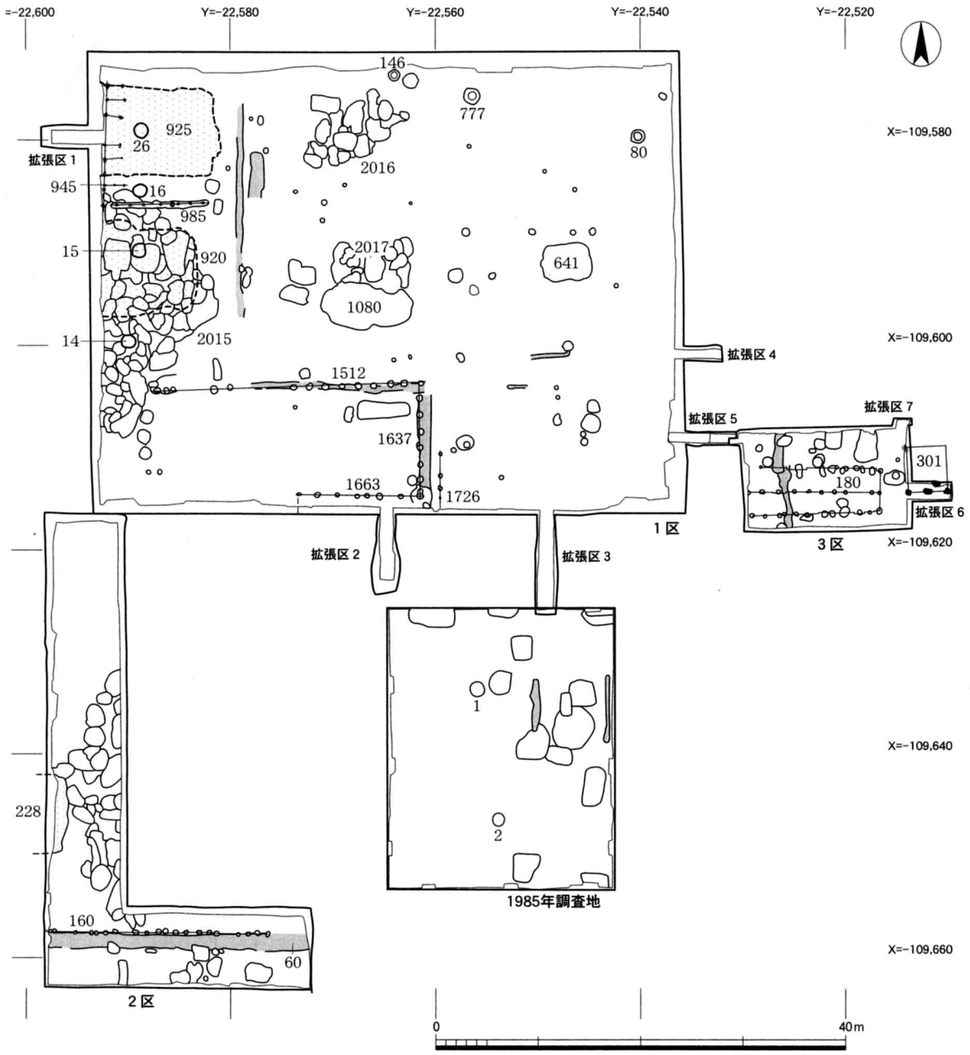
左京三条二坊九町・十町、堀河院　遺構配置図（1：1,000、報告書 P102）



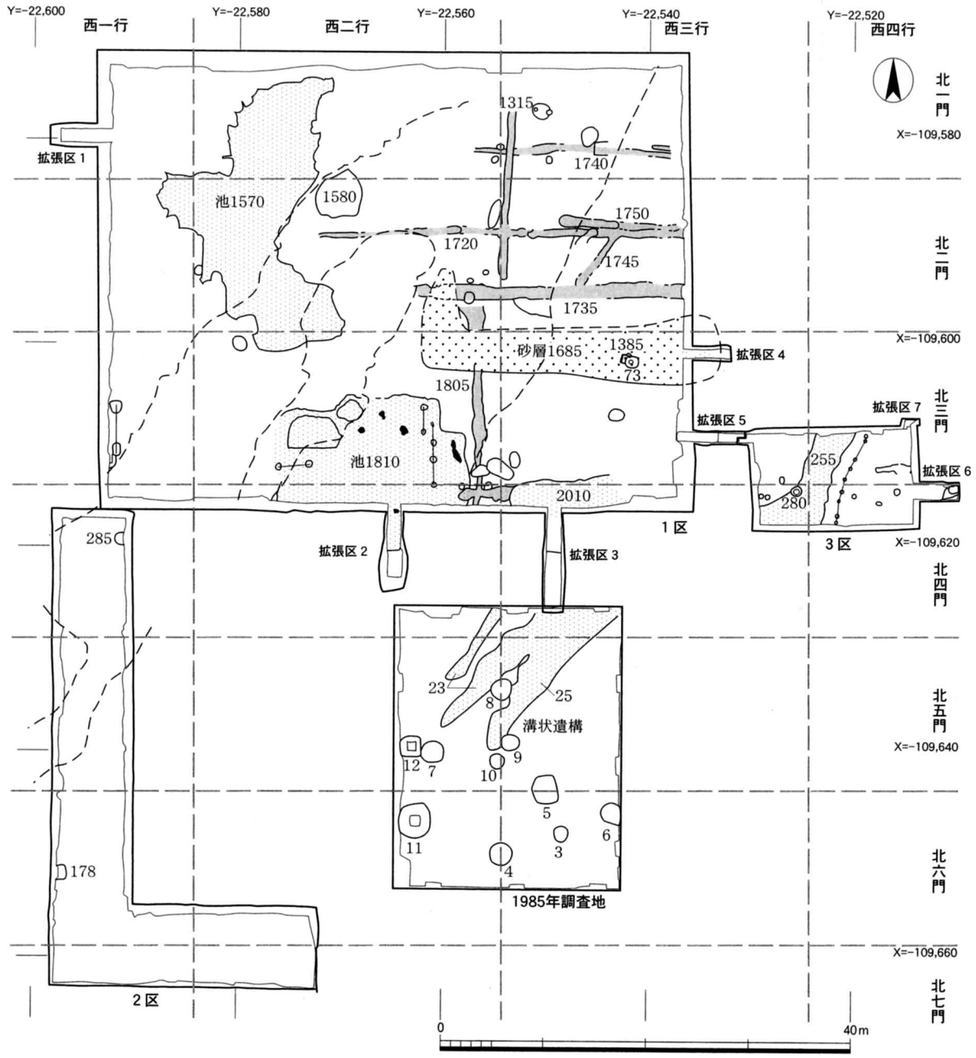
「（油小路屋敷図）」（古河市正定寺所蔵、報告書 P140）



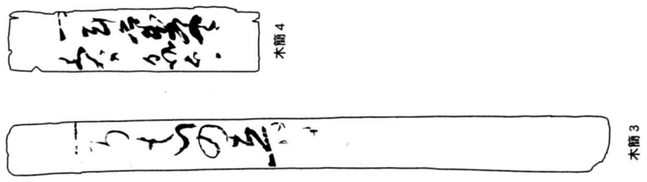
「（油小路屋敷図）」読み取り図（報告書 P141）



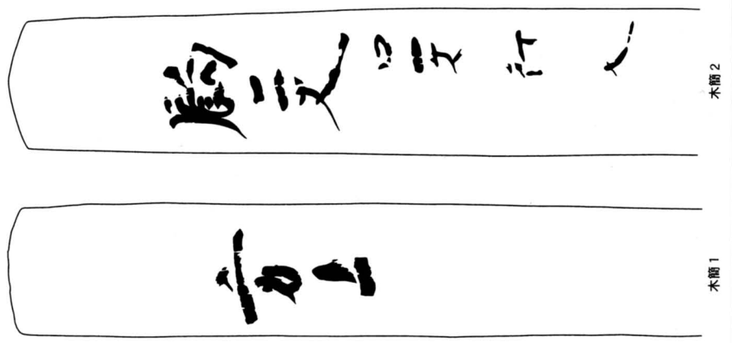
左京三条二坊十町（土井家京都屋敷）遺構配置図（1：600、報告書 P106）



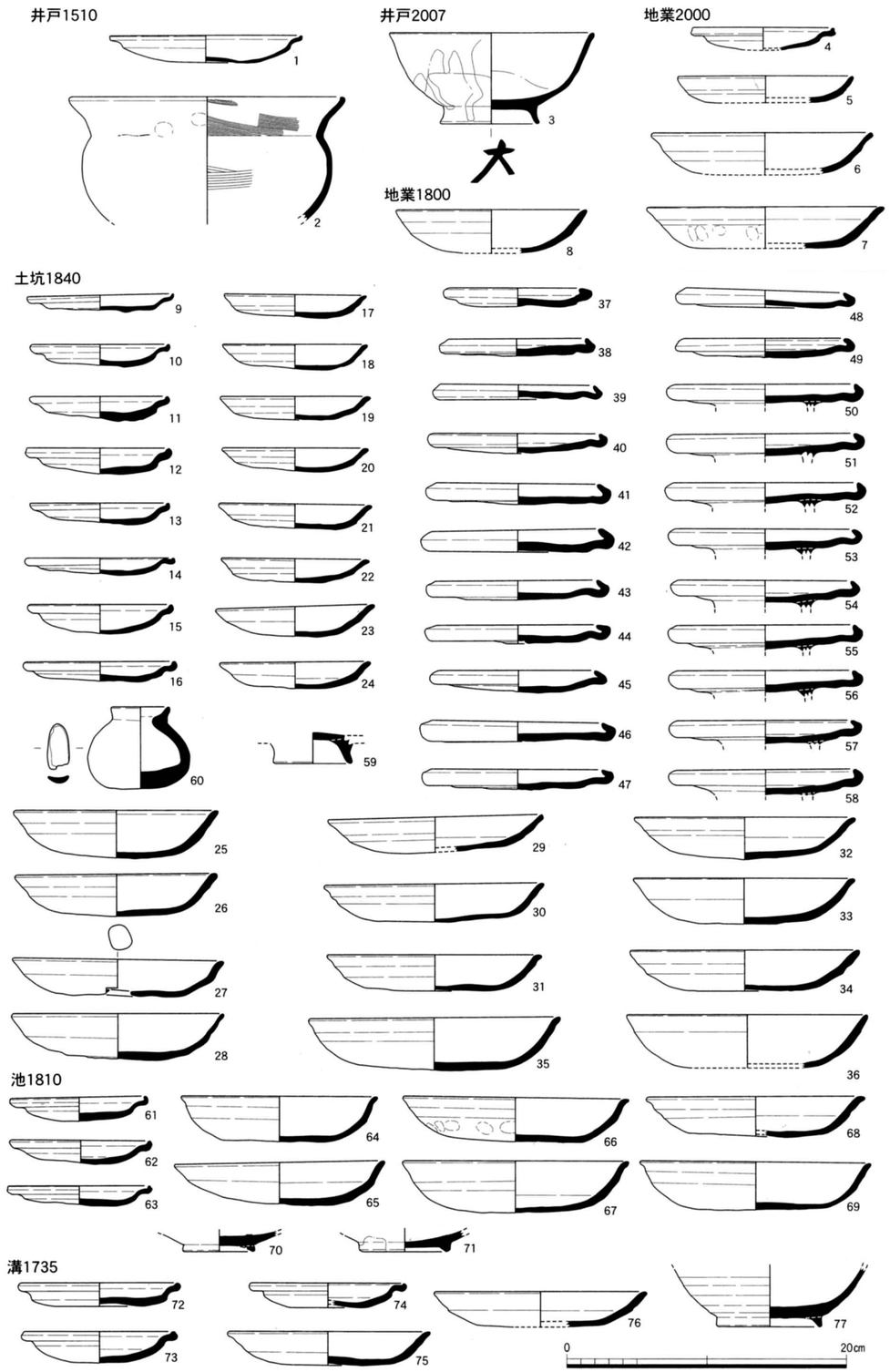
左京三条二坊十町　遺構配置図（1：600、報告書 P95）



落込 925 出土

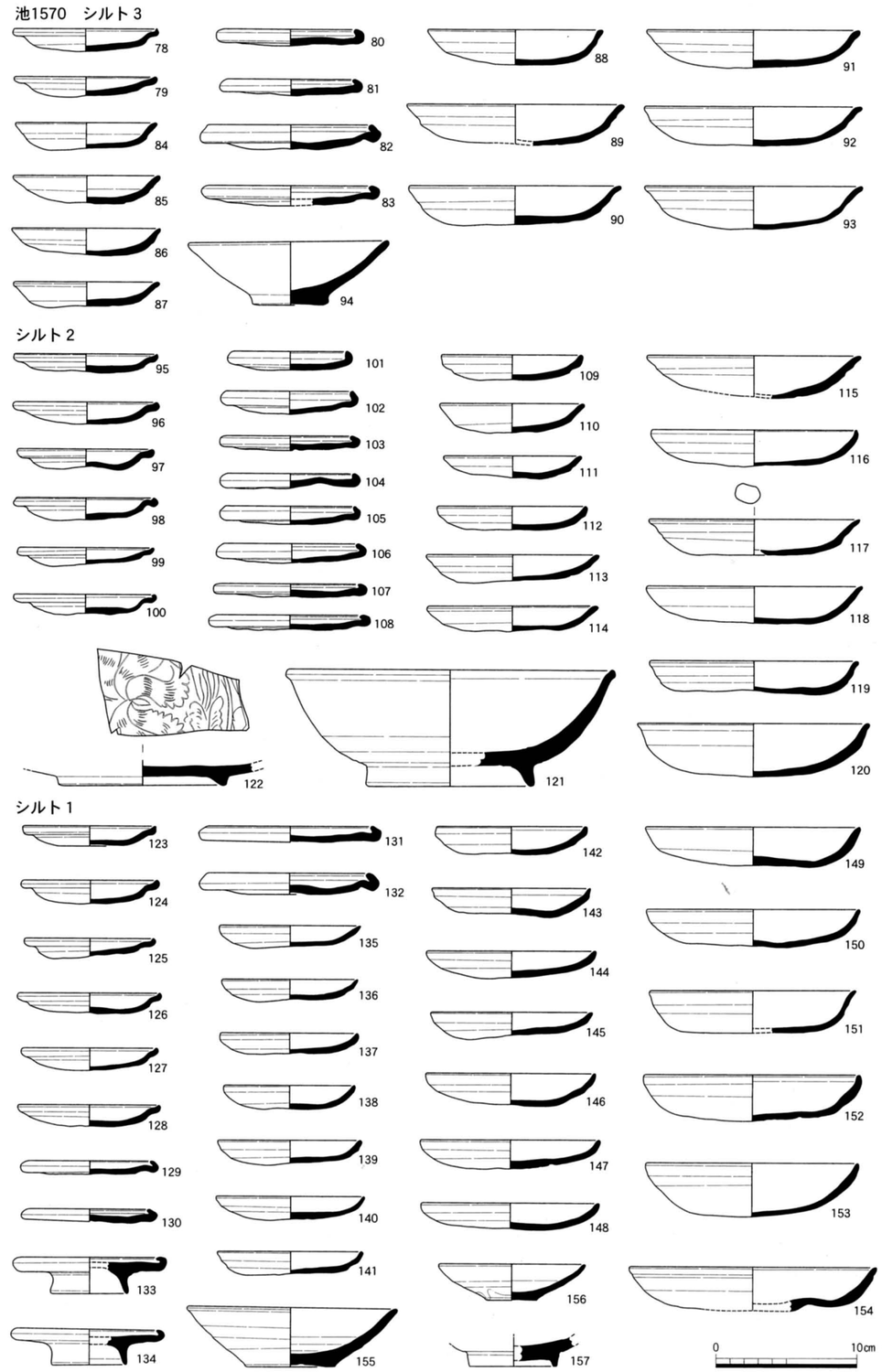


池 1570 下の地業出土



池 1810・土坑 1840 出土土器実測図（1 ： 4、報告書図版 43）

地業 1800・地業 2000 は池 1570 下の掘込み



池 1570 出土土器実測図（1 ： 4、報告書図版 44）

堀河院に関する記述（部分）

六　基経の邸宅の模様から、綺羅星のような子女たちの話に及ぶ

お邸は、堀川院と閑院とにお住まいになりましたが、堀川院の方をちゃんとした儀式のあるときの晴れの行事を催すための御殿としてお使いになり、閑院の方は、御物忌の折にお籠りになる御殿としたり、またここは、平素疎遠な人などのお伺いしないところですから、それ相当な、親しく思し召す人だけをお供につれて、お越しになる場合もおありでした。堀川院の方は、お邸の地形がじつにすばらしいところです。ですから、大臣の大饗のときの、ご来客の方々の御車の置き方など、まったく立派でした。当日の主賓の尊者の御車は、堀川の東岸に置き、牛は川に架かっている御橋の平葱柱につなぎ、その他の上達部の車は、川の西の岸に置いたのが、例がなく、まことに結構なことでしたよ。こんなふうに、尊者の御車を他の公卿の車と、別にして、ほかのところへ置くということは、堀川院だけで、他のところではけっして見られないことだと思っていましたが、今ではみなさんご承知の、頼通公のお

119　第二巻　基経

基経邸

『大鏡』（講談社学術文庫）

334　第四巻　兼家

二　すぐれた夢占い、そしてあらたかな〝打ち伏しの巫女〟のこと

そのころは、夢占いも巫女も、すぐれた者どもがいたんですってね。堀川の摂政〔兼通公〕が全盛でいらっしゃった当時、この弟君の東三条殿〔兼家公〕は、いろいろご官職を停められなさって、ひどく逆境におられた時分に、ある人の夢に、かの堀川の院〔兼通公の邸〕から、矢をおびただしく東の方へ射ているのを、いったいどういうわけだろうと、よく見ていると、それがみな東三条殿〔兼家公の邸〕に落ちたと、見たのでした。兼家公がいつもご不快にお思い申していらっしゃるところから、このように矢をお受けになったのですから、「この夢は不吉なことだなあ」と思って、その人が兼家公にも申し上げたところが、公は恐ろしくお思いになって、夢占いにお尋ねになったところ、夢占いが、

兼通邸

253　すべらぎの中　第二　紅葉の御狩

六三　白河天皇の御性格

この帝は、御心ばへたけくもやさしくもおはしましけるさまは、後三条院に似たてまつらせ給へりける。されば、ゆゆしく事々しきさまにぞ好ませ給ひける。

白河の御寺もすぐれておほきに、八面九層の塔など建てさせ給ふ。百躰の御仏など、常は供養せさせ給ふ。百躰の御燈を、一度にほどなく供ふる風流思し召しよりて、前栽のあなたに物の具隠し置きて、預百人召して、一度にたてまつらせ給ひけるに、事行ひける人心もえで、少々松燈しなどしたりけるをも、むつからせ給ひて、さらに一度に燈されなどせられけり。

鳥羽などをも広くこめて、さまざま池山などこちたくせさせ給へり。後三条院は五壇の御修法せさせ給ひても、

白河天皇

『今鏡』上（講談社学術文庫

七四　堀河天皇笛を好む事

この帝、御心ばへあてにやさしくおはしましけり。その中に、笛を優れて吹かせ給ひて、朝夕に御遊びあれば、滝口の名対面など申すも、調子高うとて、暁になる折もありけり。

その御時、笛吹き給ふ殿上人も笛の師など、みな、

「かの御時賜はりたる笛なり」など言ひて、末の世まで持ちあはれ侍るなる。

時元といふ笙の笛吹き、御覚えにて、夏は御厨子所に氷召して賜ふ。おのづからなき折ありけるには、

「すずしき御扇なり」とて、賜はせなどせさせ給ひけり。宗輔の太政大臣、近衛のすけにおはしける程など、夜もすがら御笛吹かせ給ひてぞ明かさせ給ひける。

『今鏡』上（講談社学術文庫　P296）

300　299　すべらぎの中　第二　玉章

〈補説〉

『中右記』の筆者宗忠は、堀河帝について「絃管歌詠之遊、天性所レ授、不レ愧二往古一」と記している。帝は音楽、とくに笛を愛好され、夜の御殿の壁に笛の譜を張って記憶されたほどで、その稽古ぶりは、『懐竹抄』などに、

堀河院御笛ヲアソバサレケル事、冬夜ナンド終夜ナリケルニ、大土器ヲ蔵人ニ持タセラレテ、終夜アソバサレケル御笛ノ尻ニアテラレケレバ、御息ノシヅク、一夜ニ三杯ナンドタマリケリトナン

とあり、帝の熱意のほどが知られる。その腕まえは、忠実に「近来ノ上手ハ堀河院ニ御ナリ。全ク比類ナシ。誠ニ言語ノ及ブトコロニアラズ」（『続教訓抄』）と評されている。

堀河院の笛の師は刑部卿政長で、その子の有賢は師匠の息男ということで昇殿を聴されたという。また、古記録によれば、

経信（琵琶）・基綱（琵琶）・俊頼（篳篥）・宗忠（笙・箏）・宗通（笛・琵琶）・宗能（箏）・敦家（篳篥）・敦兼（篳篥）・顕仲（笙）・雅定（笙）・師忠（和琴）・師時（笛）・師通（琵琶）

などの、音楽に堪能な公卿・殿上人が、堀河院の近臣として御遊に参加している。このように、堀河帝の御代は、管絃が隆盛した時代であった。

七五　堀河院艶書合

和歌をもたぐひなく詠ませ給ひて、五月の頃、つれづれに思し召しけるにや、歌詠む男女、詠みかはさせて御覧じける。大納言公実、中納言国信などより始めて、俊頼などいふ人々も、さまざまの薄様に書きてやり給ひけり。女は周防内侍、四条宮の筑前、高倉の一宮の紀伊、前斎宮の百合花、皇后宮の肥後、摂津の君などいふ所々の女房、われもわれもと返しあへり。また、女恨みたる歌詠みて、男のがりやりなどしたる、堀河院の艶書合とて、末の世までとどまりて、よき歌は多く撰集などに入れるなるべし。二間にてぞ講じて聞し召しける。

調査成果のまとめ

平安後期の堀河院に伴う池を２つ検出した。
重複関係は不明であるが、出土遺物から池 1810→池 1570 とみる。
池 1810 は景石を有する。底に礎石をもち建物が池内に及ぶ。
北岸の土坑から土師器が大量出土。珍奇な器形がふくまれる。
池底にピンク火山灰が流れ込む。朽木との関係が想定される。
池 1570 はシルトが厚く溜まる。景石、洲浜はない。
池下に掘込み（地業 2000 など）がある。
地業から木簡が２点出土。越前と近江の摂関家の荘園名をもつ。
両池への導水と排水は不明であるが、３区で導水路とみられる溝 255 を検出。
1983 年・1985 年調査区との関係も不明。
堀河院の寝殿など主要建物の遺構も不明
「白砂の範囲」としたものは遣水であったとみる。
９世紀後半の基経邸の遺構は未検出。
10 世紀後半の兼通邸の遺構は井戸、柱穴など少数。
鎌倉期には井戸が多い。
乙訓形の土師器皿が多い。久我家の関係か？
船入的な遺構（落込 925）がある。
妙顕寺城の西町にあたるため堀川の水運に関連する遺構か？
船入状の遺構は江戸時代初期に埋められ、土井大炊頭（古河藩主）の京屋敷となる。
土井屋敷の配置は、絵図が伝来するが遺構との関連は不明確。
幕末期の絵図には長屋が描かれ、最初に出土した漆喰遺構がその遺構か？
十町では中心部は空白であったようである。
明治２年以後、学校関係の用地となる。遺物も出土。